



理事会だより (9・11)

一、秋季俳句大会に加藤市長、井上市議会議長ご出席予定。その他取組み状況報告①選句はすべて揃い集計中②大会当日の流れ、役割分担確認③参加見込み八十名、表彰の数が多いので時間配分を入念に③寿齢者表彰確認。(事業部、総務部)なお理事会後先月に続き事業部、総務部で打合せ。

二、秋の吟行会10月28日実施につき事前の会場確認結果を報告しパンフレット配布。(総務部)

三、梅まつり俳句大会(8年2月8日)につき①兼題を「梅」「長閑」②投句締切12月3日、投句先…米山翠③選者特選賞(佃名誉会長、新井顧問、村場会長、山北・青梅・おほろ)と決定。詳細は本号12頁に(事業部)

四、新加入…富田公子さん(春野) 会員数は百四十一名に

理事会日程

10/9、11/13、12/11、
(毎月第2木曜日 けやき15時より)

「俳句おだわら」10句抄(697号より)

出澤洋子 抄出

糠床の手にやわらかき薄暑かな
青梅雨や古刹は深き黙の中
水中花一人遊びの上手な子
枯れもせで疲れてをりぬ水中花
出目金の退屈そうな泡一つ
おさな児の直だんぱんや蝸牛
よく通る介護士の声五月晴
噴く汗や吹いて名古屋の味噌煮込み
青田風猫が留守居の駐在所
スーチャーさん幽閉の地の青き蛇行

長谷川きよ志 抄出

夕さりの螢袋に灯の点る
虹といふリボンのかかるループ橋
水中花一人遊びの上手な子
おさな児の直だんぱんや蝸牛
蔵壁にのこるひのいろ百日紅
辣韭をすすぐ田川の水明かり
四葩咲く風の吊橋渡りけり
関税へ疑心暗鬼のやぶからし
ミツバチの刺客とならむ我が身かな
春の宴鳥獣戯画の帯締めて

和田恵美子	小澤 純子	峯尾ユキエ	森田 久江	豊田 幸江	木村 幸枝	中田 笑子	青山 典仁	小野 菊土	大石 雄介	足立 和子	池田 忠山	峯尾ユキエ	木村 幸枝	佐宗 欣二	米山 翠	鳥海 壮六	石井千代子	北村 文江	ミステウレット弘美
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-----------

白秋忌 北村 文江

一升瓶すっからかに送り盆
 小田原宿回遊するや赤とんぼ
 三の丸ホール昼を灯して美術展
 山妣の置き土産らしきのこ汁
 案山子立つお国訛のポンと出て
 ツキのワグマも参戦雨降山の秋祭
 駅舎古り誰が育てしや青ふくべ
 みみずくの家なつかしき白秋忌

江崎紋黄角亀虫 大石 和子

冬瓜をころがしている天の河
 猫溜まり星溜まりかな青芒
 滝のような白木槿ならここにいる
 旅のはてオンブバッタの二頭立
 紅小灰蝶おはようはりはりはりかな
 江崎紋黄角亀虫とビール飲む
 精霊飛蝗カワラナデシコ疾走す
 言葉の国奇想天外咲きました

俳句おだわら（9・19メ切り、到着順）

◆香雨・梅ごち（8・24）

忠山報

ベランダに星見あぐれば処暑の風

肥後ちさこ

夕顔の触るるをこばむ白さかな

関戸わよこ

露天湯のどこからとなく鉦叩

門松 鳳文

炎昼や体温こゆる温度計

吉田 百代

いまだなほ手放せぬまま秋扇

吉田 康雄

短冊の失せて軒場の秋風鈴

陌間みどり

暮れてなほ灯のきはだちて地藏盆

小澤 純子

しまふこと決めたる墓を洗ひけり

池田 忠山

◆こよろぎ（8・22）

つとむ報

挨拶もそこそこに辞す残暑かな

大澤 紀子

マニキュアを落とす晩夏の日曜日

高杉掘三朗

秋立つと軽き病ひの人ひとり

神山つとむ

◆小田原鹿火屋（8・29）

久江報

花園の風のたよりや妣のこゑ

足立 和子

五輪塔に光の軋む敗戦日

川本 育子

寝落ちたる嬰の涙や星月夜

高橋 小糸

雨上がり光なごやか花野かな

湯浅 義幸

折帖を奔る格言涼新た

近藤 久江

風の骨 佐々木重満

岬より風の骨来る盆踊
盆踊囃す「ヨーホイ」海に消え
沖に消ゆ唄のご詠歌鰯雲
塩辛蜻蛉秘めごと杭に囁くや
鬼やんま見透かす声の骨の奥
赤蜻蛉抱えているや黙の弾
秋晴や骨の髓まで光刺す
渡り鳥名もなき島の灯を越ゆる

佐 渡 小林 環

稲の香の広がる佐渡や島豊か
新涼や風にあふ漕ぐたらひ船
廃校の今は食堂走り蕎麦
長生きの褒美の鰯や照紅葉
橋脚にオカリナの音や小鳥来る
朝鈴や体操の影のつぼなり
秋茄子を煮たり揚げたり子ら集ふ
富士染むる秋夕焼や雨戸繰る

◆沈丁（9・4）

寶子山報

夜活に相槌を打つ虫の声

若村 京子

スパーでぎゅっと抱つこの新米五キロ

柳澤ミサ子

カラオケの止みて集くや虫の宿

田中 恵一

我もまたヨタヨタ歩くすがれ蟲

河本 純子

いつからか区切りなくして虫時雨

勝木 澄子

聞き上手そつと差し出す梨マティーニ

菅野 英余

新涼や子は半世紀無事に生き

高井 幸子

鈴虫のいよよ鳴き出す今宵かな

片野 節子

片しても捨てても居間の秋暑し

峯尾ユキエ

川向こう手を振る友や秋日和

清水美代子

張り合つて鳴く夜は避けて昼の虫

松下 俊之

それぞれの言葉あるやに虫集く

武居裕美子

ふたつある椅子に愁思の向ひ合ふ

森田 久江

花手水水の中から秋の香

川瀬 芳子

信州の蜻蛉に抜かれ九十九折

鈴木 陽子

蟪蛄や斧を翳して団十郎

神田 征夫

虫しぐれ長文読解は苦手

寶子山京子

◆春野（8・17）

きよ志報

いろいろな匂ひを湧かせ祭かな

伊藤はる子

訳ありの胡瓜雑多に策の中

内田知江子

八月 二見和江

敗戦日 瀬戸りん

太陽を弾く乳房昆布干す

宿水に金魚つるりと馴染みけり

連綿と礎の名前蟻の列

やむちに海の紺青敗戦日

吹かれをる鷺の冠羽や今朝の秋

太白の皓と匂へる初秋かな

玉乗りの猿のシンバル秋高し

秋晴や鉄板に跳ねソーセージ

年重ね未だに会へぬ道をしへ

玉虫の生きるも死ぬも愛されて

盆棚を設へ媼無言かな

一才児主役となりぬ盆座敷

八十路らの残暑の京が思ひ出と

竹さわぐ竹伐る人の影見えず

海山へ祈る八月過ぎにけり

九月来る息継ぐやうにすんなりと

桐一葉川は名を変へ瀬を変へて

凌霄に朝の日差しの非常口

かなかなかな母許の足早となる

鈴虫や地球の熱を冷ますかに

灼けるだけ灼けて信号青になる

花カンナ風の明るい田んぼ道

桃食べて語尾やわらかき妻となる

カンナ咲き散歩の道を明るくす

手火花や星生まれては又消ゆる

村芝居幽霊は今支度中

球児らの開会式の影長し

五・七・五たどれば空に天の川

万緑や元気に育つ子供達

火花果てみな残像を持ち帰る

初秋や一駅先までウォーキング

新米の湯気立ちてをり新仏

赤ペンで書き足す今年の暑さかな

尾崎 一夫

瀬戸 悠

二見 和江

長谷川きよ志

かほる報

斉藤 静

市川めぐみ

川上 靖子

加藤 健治

豊田 幸枝

柳川 紀枝

加藤 富江

小瀬村信子

加藤かほる

幸子報

大塚 行人

加藤まり子

久保寺トミ子

田中 幸子

十五報

秋惜む 吉田康雄

小流れのおところやかに萩の庭
海のぞむ丘にたたずみ秋惜む
肩を組み校歌斉唱秋夕焼
夕映えや璧くつきりと秋の山
はやばやと出窓にあかり暮の秋
秋天や峰をまたぎて電波塔
じつくりと長編読みて夜長かな
かなかなや今日はここまで野良仕事

永き夏 横塚昌平

転び寝の独りの窓や遠花火
出生率一・一五日雷
向日葵の密かに厭ふ日射しかな
猛暑日のライフセーバーめく氷菓
大西日骸骨透けて見えさうな
自転さへ止まる溽暑の午後三時
靴もたぬ数多の命追灼くる
新聞の残暑の見出し破り棄つ

現なり花野に遊ぶ母卒寿
送り火の小雨に煙り上りけり
一步づつ固め歩きの滝見かな
赤とんぼ忙しや風の雨模様
溪流のあやなす水面糸蜻蛉
鯖雲や海へ張り出す崩崖の松
目ン玉に熱を感じる酷暑かな
地球灼け鳥獣虫魚息潜む
外科医にてスイーツ男子桃を切る
八十の掌の桃やはらく包みをり
富士全し色よき桃を狩りにけり
掃苔や一族の端に我の居り
水澄むや川原雀の風に発つ
細波の消す足跡や秋の声
夜濯や白のワイシャツ野良着にす
朝影の大きな槻蟬生る
漆黒の空に花火や平和なれ
新涼や「夢の吊橋」大揺れす
我が影の八頭身や今朝の秋
我が指をいとおしく見る秋ともし
髪染めて翳す手鏡秋の風

青木 孝子
池田 令子
西賀 久實
佐宗 欣二
中田 笑子
山崎美知子
石川 州洋
庄司 下載
瀬戸 りん
高橋久美子
中山智津子
齊藤 桂
芹澤 常子
深澤 一華
松岡美和子
大島美恵子
加藤 幾代
高橋千代子
米山 翠
來田 新子
青山 典仁

幼子のいつしか眠り星月夜

大沢 年子

私雨に揺らすリユックや夕花野

小林 環

海面に深まる藍や秋入日

澁谷 明子

秋夕焼ボール拾いの犬走る

下平 美子

色なき風尊徳生家静かなり

鳥海 壮六

草けづる鋏の後先秋の蝶

古屋 徳男

本戻す本棚きつし瀬祭忌

守屋 まち

若き日に悔いなくはなし野分だつ

村場 十五

◆実のり(9・17)

たか志報

コンバイン吸ひ込む稲穂躍りをり

荒井ちゑ子

一族の声援背負う運動会

岩本ひさみ

錦絵のような富士山秋夕焼

杉本 久子

台風目のなか赤子泣きやみぬ

木村 幸枝

あをあをと言葉搜しの秋の海

新井たか志

◆草むら(9・19)

重満報

新涼を切り裂く鋏の軽さかな

石井 秀稀

秋の夜耐えがたいほど白襖

佃 悦夫

土器の声地の脈動や馬肥ゆる

佐々木重満

◆零(9・18)

史郎報

寝待月ひかる源氏の気分にて

青木たけを

カンナ・赤・怒り・情熱・フラメンコ

伊藤 道郎

戦場の幼の瞳居待ち月

佐藤 正子

沖夕焼波に鱗が燃えている

中村 裕子

光岳の光石に秋の風

本多登美子

秋うらら闘病中の遺書燃やす

岡本 史郎

◆おほる(9・20)

きよ子報

母の母までしか知らぬ秋彼岸

小野 菊土

長き夜を語り合いたる古時計

香川 花子

顧みる八十年の夜長かな

加藤 春江

山あいの電車すすきを揺さぶりぬ

瀬戸とみ子

頬杖のぐらりと崩れ夜長かな

高橋みどり

夜長の灯夢は青春真つ只中

中根登美子

富士映る湖に九月の声を聞く

中村 昌男

芒原たましいの群れ踊りけり

中津川晴江

敬老日老いに励みの褒め言葉

廣田 悦子

靴先にふと休みをり赤とんぼ

原 仁子

新米や土鍋の音に耳寄せて

松良 榮美

同じ家個々の部屋にて夜長かな

安池 利枝

懐かしき人の文読む夜長かな

二上 光子

人類へレッドカード来赤蜻蛉

横塚 昌平

鋏を持ち土にからめる秋疲れ

石井千代子

白檀の香り豊かに涼新た

石井きよ子

◆山北(8・28)

由里子報

ビール飲む空に向かって喉仏

和田恵美子

音のせぬ水琴窟や秋暑し
法師蟬ゴム手袋を裏返す
井戸水に浸す指先釣忍

◆無所属

相をゆるめて白露の枯山水
夕光を乗せくる波や赦免花
葦の穂の揃わぬ高さ秋の風
高原の風の手ざはり一葉落つ
敬老日子の辛口は愛である
思春期や冷房のない珈琲店
すっぱいの大汗ざぶり洗ひけり

秋初めこころ細げな真昼月

Y字バランスY字路バランス大大鷲
青芒トゲナシトゲトゲ遊びした

ぶちまけしあと何もかも爽やかに

墓石を抱くごと拭う盆支度

律の風迷子でいたいもう少し

香煙の魚籃観音秋の潮

騒がしき群より逃れ秋の蟬

記憶みなパステルカラー敬老日

月の客月見バーガー頬張れり

志半ば線香花火落つ

デイサービスなだめすかして今朝の夏

星 一義
石田加津子
竹下由里子

小林永以子

畠 梅乃

一ノ瀬茂代

北村 文江

岩楯恵津子

瀬戸 正洋

出澤 洋子

山本 すみ

大石 雄介

大石 和子

小澤 園子

山田 照子

田畑ヒロ子

須田 聡子

岡田 典代

杉山あけみ

杉崎 せつ

小島ノブヨシ

大佐田うづき

俳句おだわら鑑賞 (令和7年8月号)

石川州洋

出目金の退屈そうな泡ひとつ

豊田 幸枝

作者は金魚鉢をなんとはなしにみているのだろうか。
何匹か泳いでいて、その一匹は出目金だ。息なのか
鰭に付いた空気なのか泡がひとつ出目金から水面に
上っていく。ゆったりとした時間を感じる。冷房の
効いた部屋の景ではあるだろうが、できればこの数
年の茹だるような暑さではなく涼を感じる風が吹き
抜ける和室で味わいたい情景である。

内田知江子

じゃんけんは素手の勝ち負けソーダ水 村場 十五

じゃんけんはどこでも誰にでも気楽に出来る勝負
事。しかも素手であるからフェアに出来る。こんな
便利な事誰が発明したのか？尊敬に値する。勝負の
対象にするものは深刻なものや大事のものは適さな
い。とは云え「勝負は勝負」軽い緊張がゾクツと走
る。ここがじゃんけんの楽しいところ。さて結果
は?? その日の運にまかせましょう。

◆お詫びして訂正致します◆

8月号697号8頁下段の足立和子さん句の一句目

(誤) 子と一度落としてみたや蟻地獄

(正) 子を一度落してみたや蟻地獄

母の草笛／植松照子遺句抄（神山つとむ抄出）

母が吹きくれし草笛口にあて

大粒の雨弾きたる葱坊主

さみだれの空に明るき金閣寺

力瘤みせたる亡夫や麦の秋

羅の袂うすもの たもとふれ合い利休展りきゅうてん（平成二年詠）

天を指す平和の像や日の盛り（戦後五十年の折）

青葉濃し道の標の六地藏

ここよりは登城の橋や濃紫陽花

戯れに象が水噴く夏の雲

くちなしの花の夕づく巫女溜まり

燈台の百段競ふ雲の峰

獅子舞の太鼓を遠く春田打

山寺の落暉の彩に白障子

大井の里に住んで

神山つとむ

植松さんは私がよろぎに参加させてもらったころにはもう俳句の巧者であった。旅の句を詠んだり、地元の大井町の自然を詠んでいることが多い。よろぎで何回かお会いしたことがあるが、静かな日本的な昭和の初期の雰囲気的女性だったと記憶している。よろぎに毎月欠けることなく投句されている。百二歳で、小田原俳句協会で最高齢者でした。家族の支えが大きかったです。あやかりたいものです。

大井町を新井たか志氏に案内されてあちこち見せて貰ったことがあります。上大井は大井町、下大井は小田原市であることを知った。大井町は歴史の遺産が沢山残る町であり、風光明媚なところと知った。山田の辺りに往診に行くと日本の原風景が残っている。近くの上大井駅は瓢箪駅として知られている。今年も娘と孫を連れてひょうたん駅を訪れた。これを詠者は詠まれたのでしょうか。瓢箪をふくべともいう。

ぽっかりと出来し駅舎のふくべ棚 照子

岩楯恵津子

新緑の影の幼なさ踏まず行く

田畑ヒロ子

世界が緑一色に染まり人の心も何と清清しく透明感にあふれた、命がおどる季節がやってきたことか。その美しい樹の影を踏まずに避けて通ったと云う作者。私なら影は別物なのだから踏もうと痛くはなからうと思うのではないか。そんな繊細さを持ち合わせておられる女性とは、さぞかし奥床しい心の持ち主であられること疑い無し。上げた足を一瞬よけて行かれるその仕種に憧れを持って拝読させていただきました。

初春の土産は塗りの箸がいい

瀧本 敦子

亡き友のささやきに似た春の風

武居裕美子

細長き夢二の切手春灯

竹下由里子

頬杖の外れてからの夜長かな

田下 昌人

負んぶ子の首振りにけり秋あかね

田中 恵一

夕暮れの風を放さぬ白桔梗

田中 幸子

春一番明けの海原汚しけり

田淵 令子

赤煉瓦倉庫の日陰可^コ可^カ可^コ楽^{ラク}

佃 悦夫

はたた神明日からケーキは食べません

出澤 洋子

叱られて猫捨てにゆく十三夜

豊田 幸枝

九十の踊浴衣の丈詰めて

鳥海 壮六

瀬戸 正洋

夏蝶の声だろうか、あれは鳥唄

瀧本 敦子

夏蝶は声を発している。夏蝶の声を聴いている。夏蝶には声を発する理由があるのだ。自問自答である。あれは鳥唄だと答える。鳥唄とは反戦を願いを込めたラブソングである。おろかな人間は風に乗り海を渡ることはできない。唄うことが唯一の行為だと思っている。パレスチナやウクライナでは八十年前と同じ光景が繰り返される。人間を殺めてはいけない。夏蝶が声を発した理由をもう一度考えてみるべきだと思う。

ホットミルクの白やはらかき冬の朝

武居裕美子

飛ばし読む薬の処方鳳仙花

竹下由里子

沖雲に天使の梯子なづな摘む

田下 昌人

点滴をぼんやり眺む夜長かな

田中 恵一

かなかなや山のホテルのミルクテイ

田中 幸子

どんぐりの落ちたる水輪より唱歌

田畑ヒロ子

こほろぎや納屋の大甕捨てちまを

田淵 令子

赤煉瓦倉庫の日陰可^コ可^カ可^コ楽^{ラク}

佃 悦夫

駐在さん焼きそばら下げ村祭

出澤 洋子

しぐるるや和紙のあかりのそば処

豊田 幸枝

秋蝶や同姓多き忠魂碑

鳥海 壮六

伊藤 道郎

蝸牛自問自答の筋残し

最近蝸牛をまったく見かけなくなった。水の地球の皮膚の一部であった蝸牛がいなくなり本当に寂しい。大地をゆったりと首をふりふり歩みを進める蝸牛は何を自問自答をしていたのか。姿を消したのはきつと猛暑という氣候災害到来の前触れだったのだろう。

四季の豊かであった日本の山河も経済優先の環境汚染が進み小さな生き物は生きるのがとても困難。蝸牛の筋は我々人類への大いなる警鐘だったのだ。

水底に動かぬ魚影寒に入る

錆色の鉄路の砂利や鳥帰る

大木を揺さ振っている油蟬

またひとつ老舗の消えて初時雨

冬銀河抱く一樹となりにけり

子供らが風になったよ芒原

鈴虫や素顔を映す夜の窓

女子先生校舎とオルガン島の春

朝顔のぼつと吐き出す夜の匂ひ

神の留守監視カメラのそこかしこ

わかりあふごとく海月のひらきあふ

中津川晴江

中田 笑子

中根 和子

中根登美子

中野 文子

中村 裕子

中村 昌男

中山智津子

野川木一路

陌間みどり

長谷川きよ志

畠 梅乃

田中 恵一

おはやうと手話の挨拶梅匂ふ

梅の里の朝、仕事か用事で出かける近隣の方たちとの触れあう日常、咲き始めた梅の清楚な白色と仄かな香りが包んでいます。日常的に会っている人とは表情や簡単な動作で意思は十分に通じますが、聴覚に障害のある方とのコミュニケーションには手話を用います。「梅匂ふ」が「おはよう」の手話とマッチしています。

今日もその挨拶でいいスタートが切れたようです。

危険です地球沸騰の暑さかな

日焼子のまなこ一途に日記書く

大木を揺さ振っている油蟬

またひとつ老舗の消えて初時雨

麦の芽や天つらぬける子らの声

ふわふわと嬰の欠伸や風薫る

朝富士や鵜の浮巢に一番子

女子先生校舎とオルガン島の春

うららかや子の手開けばだんご虫

長き夜は亡き寂聴の恋講議

わかりあふごとく海月のひらきあふ

中田 笑子

中津川晴江

中根 和子

中根登美子

中野 文子

中村 裕子

中村 昌男

中山智津子

野川木一路

陌間みどり

長谷川きよ志

畠 梅乃

高杉掘三朗

重い荷を支え合い待つ能登の春

原 仁子

戦後八十年の今年、体験者が僅かとなり後世に戦争の恐さや歴史を伝えるメディアが多かった。東日本大震災を詠った俳句も数多くあったが、時の経過と共に薄れていく。まだ寒さ厳しい能登の冬。未だ復興は遠い中、被災者同士が励まし合いながら春を待っている。

人間は忘れてしまう生き物だ。この句を通じて忘れてはいけない事の一つに気づかされ、俳句を通して薄れゆく事柄を鮮明に蘇らす事が出来る事を再認識した。

追ひかけて子の頭へと夏帽子

肥後ちさこ

蛍の灯兄の手渡し小さき手に

廣田 悦子

利休忌に息凝らし聞く釜の音

深澤 一華

梅香る空のあなたに去りし人

二上 光子

八月の祈りは海へまた空へ

二見 和江

窓開けて夜風入れたり茄子の馬

古屋 徳男

なかなか咲かぬ朝顔にも挨拶

寶子山京子

七草やかけがえの無き君がいて

穂坂志げる

サイダーや中二男子のうすらひげ

星 一義

春光や童地藏の片えくぼ

松良 榮美

庭の香を居間に映して水仙花

松下 俊之

高橋みどり

晶々と富士の暮れゆく帰雁かな

古屋 徳男

一枚の絵を見る如き句に魅了されました。秋に來た雁が三月頃北に帰って行く。数十羽の群れが列を組み、形を変えながら飛んでゆく。その姿は哀れ深いものがあり、和歌に数多く詠まれています。最近は社会情勢、異常気象の為か日本人の繊細な感性が失われている様に感じられます。

晶々とした春の夕暮「無事に帰れよ」「又来いよ」と祈りつつ見送る一時の情景を思い浮かべこの句を選ばせて頂きました。

重い荷を支え合い待つ能登の春

原 仁子

湯上りの頬にことさら処暑の風

肥後ちさこ

生き方は引き算もよし風光る

廣田 悦子

夕映の黒堀小路柿紅葉

深澤 一華

花野吹く風となりしや去りし君

二上 光子

凌霄の散りてさらなる自己主張

二見 和江

あぢさゐのごつんごつんともう他力

寶子山京子

十六夜や欠けたるこころ見透かされ

穂坂志げる

ものの角みなとれてゆく花の昼

星 一義

明け初むる白き満月冴返る

松良 榮美

堀底に映す古城の枝垂れ梅

松下 俊之

第62回小田原梅まつり俳句大会

第一部 作品募集

兼題

「梅」(春に限る)「長閑」(いずれも傍題可)

各一句一組 未発表作品に限る

締切 令和七年十二月三日(水) 必着

整理費 一組に付き千円(何組でも可)

投句先

〒250・0851 小田原市曾比二四三二

米山 翠 ☎〇四六五―三六―四五九〇

*作品は原稿どおり印刷します。

選者

協会役員及び各地区有力作家(投句者に限る)

賞

県知事賞以下二十位まで 選者特選賞六人

第二部 俳句大会

日時

令和八年二月八日(日)

会場

おだわら市民交流センター(UMECO)

受付

十一時 投句締切…十二時 開会…十二時半

整理費

千円(呈飲料・菓子)

席題

春季雑詠一句と席題当日発表一句 総互選

賞

市長賞以下五十位まで(結社賞含む) 参加賞

(主催)

小田原市観光協会

(主管) 小田原俳句協会

(後援)

各地区俳句協会

*各グループは当日までに結社賞をご用意下さい。

*会場は飲食可能です。感染症防止対策にご協力ください。

小田原俳句協会

〒二五〇一〇〇四二 小田原市荻窪五四九一十七

村場 十五方

俳句おだわら9月号追加

◆零(8・21)

史郎報

八月は多くの人を想いけり

青木たけを

輪廻転生さみしき夜は金魚かな

伊藤 道郎

時流れ二人の門出祝花火

佐藤 正子

秋あかね空に別れのりハ―サル

中村 裕子

シーグラスひと夏の恋光りけり

本多登美子

秋立つ日短冊替える妻忍者

岡本 史郎

秋の吟行会のお知らせ

実施日

令和7年10月28日(火) 雨天決行

吟行地

松永記念館展示室、記念館周辺の神社仏閣

句会場

松永記念館本館2階

小田原市板橋941の1 ☎0465・22・3635

受付

11時半から 句会費五百円

句会

13時から 投句…囁目3句(締切12時半) 5句総互選

*各自周辺吟行、句会場で食事可。

*事前申込の必要はありません。お仲間(会員以外も可)を

お誘い合わせの上現地にご集合下さい。

総務部 問合せ

(伊藤 090・9204・9232

佐々木 080・1247・8878)